

1 3日の金曜日 と ふたりの娘

黒川 文



目次

1	1
2	4
3	7

1

わたしの勤めていた会社が倒産し、急遽、転職先を探しハローワークで紹介された人材派遣会社に籍を置くことになった。しばらくは事務所に常駐しながら、あちこちの企業に面接に行き、派遣先を探すことになる。この間、給与はかなり据え置かれる。派遣させられて初めていくらと言う条件だった。

今の家の住宅ローンは到底払えそうになかった。

そのため、日曜ごとに近くの町にある不動産業者を回り、適当な貸家を探したのだった。

今まで住んでいた家はちょっと大きかった。田舎だからと大きめの土地を買い、建ぺい率ギリギリまで建てたのだ。40年ローンだったが、会社の業績も当時はよかったし、ボーナス払いの月も生活に余裕があった。

大きな家だっただけに、数年住んでいるうち荷物が増えに増えた。子供の学習机は言うに及ばず、妻の趣味であるピアノも買った。電化製品も物置一杯あり、季節の替わり目に入れ替えるのも大変だった。だから急に引越しとなると簡単にはいかない。同じくらいの大きさの家でなければこれらの荷物を収容しようがなかったのだ。——後から考えると全部捨ててしまい、小さな家かマンションを探すべきだったと思っている。

何軒もの不動産屋さんをハシゴして、家賃の高さを思い知らされた。そんなとき、ふと気になって入った古びた不動産屋さんでとある物件を紹介された。

「お宅の言う様な条件に合致するとなると、ここしかありませんや」

彼の指し示す物件の家賃は格段に安かった。以前住んでいた家と同じくらいのスペースがあるのに、月五万でいいと言う。敷金もなしだった。こんな破格の条件だとライバルも多いに違いない。しかし、他に誰も借り手がないみたいだった。

わたしたち家族は不動産屋に連れられて現地を見に行った。

家の周りを取り囲んでいる生け垣は鬱蒼と伸びるに任せたかの様に、かなり大きくなっていた。家本体は日当たりが悪そうに思えた。何だかじとじとしている感じだった。しかし、これは、入居前に植木屋さんが剪定してくれるそうだ。

門扉を開けて中に一步入ると、足元に黒い猫がいた。わたしたちの侵入を喜んでいない様だった。毛を逆立てて、わたしたちを威嚇した。不動産屋がこれを棒きれで追い払った。

玄関の鍵を開けると、中から、むっとしたよどんだ空気が流れてきた。わたしは思わずむせかえり、ハンカチで口元を覆った。妻と娘を見ると同じ様にしていた。

「ささ、中へどうぞ」

玄関先には、見学者用と思しきスリッパが置かれてあった。わたしは、それに足を通した。

壁はすっかり変色し、所々、壁紙が剥がれて丸まっていた。下地にはカビが生え、黒い点々を作っていた。壁紙は元はホワイトだったのだろうか。全面が茶色に変色し、その上、あちこちに、薄茶色のシミがついていた。油污れ？ 血の跡？ まさかな。わたしは湧き上がってくる妄想を振り払った。

二階の洋室に入ると、ここだけ家具——子供机の様に見えた——が置かれていた。不動産屋の言うことには、撤去しようとしたのだが、どうしても部屋から出せなかったのだそうだった。

「部屋から出せない？ ではどうやって入れたのですか？」

わたしは食ってかかる様な口調になった。

「多分、大工さんが新築時に造ってくれたのと違いますか？」

と不動産屋は言った。一応筋は通っている。

わたしは胸騒ぎがして、引き出しを開けると日記帳が一冊残っていた。前の住民のものだろう。子供の字だった。

9月6日金曜日、学校で穂花ちゃんたちに取り囲まれ悪口を言われた。泣いてしまった。

9月9日月曜日、誰かわからないが、机に悪口が書いてあった。もう、転校したい。

9月10日火曜日、お父さんの会社がうまくいき、都心に転校できることになった。嬉しい！

9月12日木曜日、転校の話はなしになった。お父さんの機嫌が悪い。

9月13日の金曜日。一階で激しい口論があり、ドタンバタンと家具の倒れる音がした。わたしが恐る恐る見に行くと、お父さんがお母さんに暴力をふるっていた。お母さんは床の上に横たわり、動かなくなった。その瞬間、お父さんはわたしの方を見た。次はわたしだ！

わたしは階段を駆け上がり、子供部屋に入るとドアを閉めて鍵を掛けた。階段からドタドタと言う足音が迫ってきて、ドアの前で止まり、そして、どんどんとドアを叩く音が響いた。どうしよう。開けないと怒られる？ それとも開けじゃ駄目？ どうしたらいいの？ 神様！ 助けて下さい！ ……。

そこで日記は終わっていた。

わたしは、パタリとページを閉じると、この家で過去に何があったのか、それはひょっとして惨劇ではなかったのか、思索をぐるぐると巡らせた。今となっては、この家の壁紙に所々ある壁のシミも血の跡に見えてくる。

「不動産屋さん。この物件の過去の事故ですが。告知義務があるのではないですか？」

「いや、何もありませんよ。……ええ、何にも」

彼の口調は、語尾が震えていた。絶対に何かある。わたしはそう確信していた。賃貸物件の場合、告知の義務があるのは三年前のことまでだ。

でも、今のわたしに選択肢はなかった。この家で契約を決めた。

わたしはこの家から毎日、派遣先の会社に勤めた。

家はなんとなく薄気味悪い。

妻や子供たちもそう感じているらしく、夕食のときも、テレビを見ている間も口数が少なくなり、会話も減っていった。陰気な家に陰気な家族。もしかしたら、あの惨劇を引き起こした父親は、この家の陰気さが作り出した魔物ではないのか。わたしはその陰気さの正体を探りたいと思いはじめた。

手懸かりは、あの日記の記載だけ。

でも、もしかしたら何かわかるかも知れない。そう思い、わたしは自分の業務日誌を過去にさかのぼって調べ始めた。9月に13日の金曜日があるのは直近では2019年と2013年だけだった。

わたしは次の日、休暇をとり、町の図書館に行った。新聞のバックナンバーを調べるためだった。一ヶ月ぶんくらいは棚に収納されているが、数ヶ月前より古いものは縮刷版と呼ばれる新聞社発行の冊子に収められていた。それより古いものはマイクロフィルムだ。何社かの新聞の地方欄を探すと2019年の9月14日土曜日の記事の中に前日起こった事件の概要が載っていた。

「一家で謎の死亡事件。夫と妻と子供ひとりの遺体が発見された」とあった。

他殺か一家心中かは不明で警察は両面で捜査中と書いてある。

やはり、あの日記は殺された少女の最後の言葉だったのだ。わたしはそう確信した。

2

次の日、わたしが職場に行くと派遣元の会社の営業マンが先に到着していた。「山田さん。どうして昨日、休暇なんか取ったんです？ こちらの主任さんはひどくお怒りですよ！ 大事な会議だったのに、資料が間に合わなかったと。こちらには強硬な苦情が入って来ていますよ！ 説明してもらいましょうか。こちらの会社にも迷惑をかけたことになりますし、我が社の信用にも傷をつけたのですよ！」

と、彼はわたしが休暇を取ったことに文句をつけた。
昨日の朝のこと。わたしは職場の上司と派遣元の管理者に確認をしてから休暇を願い出たのだ。今になって問題にするなど、非常識なのはその主任とこの男ではないのか？

しかし、そんなことを主張してみても立場上、無駄なことはわかっていた。
お怒りなのは事実なのだ。わたしは素直に頭を下げた。そして派遣元の上司とわたしの連名で始末書を出すことで折り合いがついた。「二度と承諾のない休暇はとりません」と。

その日、わたしは不機嫌さ満面で帰宅した。
先に帰宅していた妻は陰気な顔で家事をこなしていた。
「おい。夕食の準備はまだなのか！」
わたしは、つい言葉を荒げた。
妻の隣で手伝っていた娘もおびえた顔でわたしと妻の顔をキョロキョロと見回した。
なぜ叱られるのかわからない。それは確かにそうだろう。家が貧乏になり、妻は仕事をかけ持ちして、家事までこなしている。失業したときの約束ではわたしも家事を半分、受け持つことになっていた。どう考えても妻に当たる理由はなかった。

食事の後、妻はわたしに相談があると話しかけた。
「生活のことか？」
「ううん」と妻は首を横に振った。娘のことらしい。「学校でいじめに遭っているらしいの。できれば学区外の小学校に転校させたいと思うの」
「ええ？ うちに金がないのはわかっているだろう！ 贅沢言うんじゃない！」
わたしは声を荒げた。

しかし、話はそこで終わらなかった。次の日も、その次の日も妻は何度も繰り返した。

いじめが段々とひどくなり、もう耐えられないという。

それは確かに、よその学校に移った方がいいだろう。しかし、学区外だと通学費用が余分にかかるし、教科書や教材も新たに必要になるかも知れないし、制服や体操服も替わってしまうのだ。つい先日買いそろえたばかりなのに。

勤め先でもわたしの立場は悪くなる一方だった。

例の主任からにらまれ、もうよっぽど嫌われているみたいで、雑用ばかりを命じられ、何か理由をつけて派遣契約を打ち切ろうという態度がありありだった。朝の8時半から夕方の5時半までわたしには針のむしろだったのだ。

陰気な家に帰ると娘は泣いていて、妻は繰り返言ばかり。

わたしの精神は限界に達していた。問題が仕事のことでなければまだ耐えられただろう。言われたことを愚直に実行して成果物を提出し、文句のない程度に仕上げることは出来ていたし、もし、派遣契約を解除されても、また別の職場で一から頑張ればいい。そうも思っていた。しかし、気持ちの安寧を求めるべき家庭内まで崩壊寸前になると、もう、社会のどこにも逃げ場を失うこととなってしまうていた。

何か気を紛らわす手段を考えるべきだった。

しかし、小遣いすら受け取っていなかったし、それまでの趣味も全部おあずけ状態になっていたのだ。段々と怒りは家族へと向けられるようになりつつあった。

その日の夕食後にも、妻は娘の転校話に加えて、自分の仕事の愚痴を始めた。職場に嫌なひとがいて、ことある毎に意地悪されている。もう今の仕事を続けたくない。新たに仕事を探したいという。

今の家計は、わたしの給与と妻の給与でギリギリ成り立っていた。余分な出費は一円も認められない。嫌なひとがいるくらいの理由で失業してもらっては困るのだ。わたしは妻にこんこんと現実を見つめ直すことを要求した。

説教が30分を超えた頃、とうとう妻は切れてしまった。

「仕事が辛いのはあなただけじゃないのよ！ どうしてわかってくれないのよ！ あなたは仕事で辛い思いをしたことはないの？ そんなひと、世の中にいないわよね？ どうしてあたしだけがこんなことをガマンしなければならないのよ！ あたし絶対に転職するからね！」

その言葉にわたしも切れた。

大声を出しながら台所にあった包丁を手にとって振り回し、その勢いなのだろうか。そのまま妻を刺し、泣きわめく娘を追いかけた。

娘は二階に駆け上がり、ドアを閉めて棚か何かを置いたらしくドアを開かなくした。「おい！ 開けろ。開けるんだ。父親に逆らう奴は許さないぞ！」

わたしはドアをどんとどんと叩き続け、娘を脅かした。
「お父さんやめて！ 許して。学校にはちゃんと通うから。いじめられても耐えるから」
「おい！ 開けるんだ！」

一時間後……わたしは子供部屋の中で茫然としていた。
床は血で染まり、壁にも薄茶色の染みの上に赤い血が飛び散っていた。

わたしは、自分自身が「自分」ではない別のものにかわっていることに気づいた。
——普段ならそんなことで怒り心頭になることなどなかったはずだ。この程度のいざこざなんて、結婚当初、いや、付き合った当初からよくあったのだ。それがこの日、このときに限りなぜ凶行に及んだのか？ 何か見えないものがこの家族に取り憑き、悪業をなしているとしたかと思えなかった。

わたしは、子供机の上に娘の字で書かれた日記を見つけた。
ページを繰り、文字を目で追っていき、ハッとなった。
……まるでこの物件を見に来たときにあったあの日記の内容そのままだったからだ。前の家族もこんな惨劇に遭っていたのだろうか。自分がそんな事件の主人公になるとは、少しも……いや、内心どこかで気づいていたのだろう。だから、不吉な予感しかなかったのだ。わたしは自分の手を見た。血で染まりヌルヌルした感触の包丁のとつてがあり、油脂で滑って自分の手も少し切っていたみたいだった。

壁にかかったカレンダーを見ると、今日は2024年9月13日だった。曜日は確かめなくても「金曜日」だった。

3

——前の家族は最後にどうなったのだろう？

新聞記事では生存者はいなかった。警察は心中か他殺か両面で捜査をしていたみたいだった。だとしたら？　後はわたしの死で物語は終了する。

あの不動産屋は、また新しい居住者を探すだろう。それは食い止めたかった。こんな惨劇は自分で終わりにしなければならない。しかし、その方策は今のわたしには考えられなかった。

そして、わたしは風呂場に行き血を洗い流した。何度も何度も石鹸を塗ってシャワーの水をかけ、同じ事を朝まで繰り返した。血の臭いと脂分はどうやっても落ちなかった。朝方……惨劇の現場をそのままにして、わたしは家を出た。

記事のあった地元の新聞社に行き地方欄の担当部署を訪れ、当時のニュースについて聞いた。聞いた。

「ああ、あの事件ですか？」

担当の男は軽そうな返事をした。

「記事では惨劇のように思いましたが……」

「実はひとり、生存者がいたという証言があったんですよ。本当の所はよくわからなかったんですけどね」

「ええ？」

「夫と妻と娘の死体が見つかったんですが、近所のひとの話では、もうひとりお嬢さんがいたそうなんです」

「娘が？　もうひとり？　彼女は怎么样了？」

「それが……当時も警察では行方を追ったのですが、未だ見つかっていないそうなんです。結局、近所のひとの思い違いで娘はひとりだけだったということで落ち着いたみたいです。住民票や戸籍を調べたそうですが、やはり、子供は殺された女の子ひとりだったと」

「ええ？」

あまり長時間、同じ場所にいては危険だった。新聞社を後にして近くの公園で立ち止まった。ブランコに腰掛け、揺らぎながらここ数日のことを思い返した。

自分で自分のやったことが信じられなかった。誰かに突き動かされたと言うのだろうか。もうひとり誰かがいたのだ。あの家には。

しかし、もう確かめるすべはなかった。家には死体が転がっているはずだし、異臭がすると近所のひとが警察に通報したら、あっという間に自分は捕まってしまうだろう。

もう一度、図書館に行ってみた。

もうひとつの13日の金曜日だった2013年の9月の分を確かめるためだ。

やはり、同じ様な心中事件が報じられていた。

「むむ？」

こちらは心中未遂事件となっていて、死にきれなかった父親が逮捕されていた。

殺されたのは娘ひとりだけ。妻はかろうじて病院で一命を取り留めていた。

あと思った。

あの家には、その子の怨念が今もさまよい、あの世からそこに住む人をたぐり寄せていたのだ。近所のひとの言うもう一人の子供とは彼女の幽霊だったのだ。わたしはそう確信した。住む人に不幸をもたらし、あの世へと引き込む。わたしはそれに気づかず大変なことをしてしまったと、あの家を選んだことをひどく後悔した。

家の前に立ち戻ると、すでに警官が周りを取り囲んでいて大勢が中と外を行き来していた。わたしは遠くから見守る野次馬である近所のひとりに尋ねてみた。

「どんな家族だったのですか？」

「そうねえ……」

初老の女性はわたしがその家の主だったことに気づいていないみたいだった。「ご夫婦で娘さん『ふたり』と一緒に住んでいたみたい。でも、会っても挨拶もしないし、何となく陰気なご一家だったわ」

と、語った。

彼女の目にはもうひとりの「娘」が写っていた。やはり、わたしたちは幽霊と一緒に住んでいたのだ。

「それに、こんな事件が昔にもあったような気がするわ」

と、どこかひとごとみたいな言い方をした。

もう、他人のことに関わることもなかったのだろう。

この家にまつわる物語の連鎖を止めるには、わたしが生き残って人生をやり直して、幽霊の思い通りにはさせないことだと思案を巡らせた。でも、ふたりも手にかけたのだ。もしかしたら極刑も免れないかも知れなかった。極刑を回避するためには？　わたしは公園の雲梯《うんてい》に目をやった。あそこに縄をかけたらどうだろう？　ひと思いに楽になれるかも知れない。しかし、死への恐れから決心はつかなかった。

まるで、その時に生き残った父親を責めるが如く、わたしの精神を追い詰めた。

その日の午後、わたしは警察に自首した。了

13日の金曜日とふたりの娘

著 者 黒川 文

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
